

勝海舟の生涯

文政6年1月30日（1823年3月12日－明
月21日）は、江戸時代末期の武士（幕臣）、明
勲等は正二位勲一等伯爵。山岡鉄舟、高橋泥舟と
呼ばれる。勝の最大の功績は徳川最後の将軍徳川
喜に代わり、薩摩の西郷隆盛と会見し見事、江戸
を戦火から救い「江戸城無血開城」を成し遂げた



治32年（1899年）1
治初期の政治家。位階
共に「幕末の三舟」と
十五台将軍、徳川慶
八百八町、市民百万人
ことである、その事前

策として、以前小生の「神奈川歴史研究会」で講演した「山岡鉄舟の生涯」のなかで論じた、山岡鉄舟の働きや「篤姫」そして「皇女和宮」のはたらきもある。勝の幼名および通称は麟太郎。諱は義邦、明治維新後改名して安芳。これは幕末に武家官位である「安房守」を名乗ったことから勝安房として知られていたため、維新後は「安房」を避けて同音（あんほう）の「安芳」に代えたもの。勝本人は「アホウ」とも読めると言っている。海舟は号で、佐久間象山直筆の書、「海舟書屋」からとったものである。海舟という号は元は誰のものであったかは分からないという。父は旗本小普請組（41石）の勝小吉、母は信。幕末の剣客・男谷信友は従兄弟に当たる。家紋は丸に剣花菱。

10代の頃から島田虎之助に入門し剣術・禅を学び直心影流剣術の免許皆伝となる。16歳で家督を継ぎ弘化2年（1845年）から永井青崖に蘭学を学び、赤坂田町に私塾「水解塾」を開く。安政の改革で才能を見出され、長崎海軍伝習所に入所。万延元年（1860年）には咸臨丸で渡米し、帰国後軍艦奉行並となり神戸海軍操練所を開設。戊辰戦争時には、幕府軍の軍事総裁となり、徹底抗戦を主張する小栗忠順に対し、早期停戦と江戸城無血開城を主張し実現。明治維新後は、参議、海軍卿、その後伯爵、枢密顧問官となり政府の日清戦争に終始反対した。

勝海舟の生涯 生い立ち

文政6年（1823年）、江戸本所亀沢町の生まれ。父・小吉の実家である男谷家で誕生した。曾祖父・銀一は、越後国三島郡長島村の貧農の家に生まれた盲人であった。江戸へ出て高利貸し（盲人に許されていた）で成功し巨万の富を得て朝廷より盲官の最高位検校を買官し「米山検校」を名乗った。銀一は長男の忠之丞に御家人男谷（おだに）家の株を買い与えた。男谷平蔵の三男が海舟の父・勝小吉である。小吉は三男であったため、男谷家から勝家に婿養子に出された。勝家は小普請組という無役で小身の旗本である。勝家は天正3年（1575年）以来の御家人であり、系譜上海舟の高祖父に当たる命雅（のぶまさ）が宝暦2年（1752年）に累進して旗本の列に加わったもので、古参の幕臣であった。幼少時、男谷の親類・阿茶の局の紹介で11代将軍徳川家斉の孫・初之丞（後の一橋慶昌）の遊び相手として江戸城へ召されている。一橋家の家臣として出世する可能性もあったが、慶昌が早世したためその望みは消えることとなる。

生家の男谷家で7歳まで過ごした後は、赤坂へ転居するまでを本所入江町（現在の墨田区緑4-24）で暮らした。

修行時代

剣術は、実父・小吉の本家で従兄弟の男谷精一郎の道場、後に精一郎の高弟・島田虎之助の道場で習い、直心影流の免許皆伝となる。師匠の虎之助の勧めにより禅も学んだ。

蘭学は、江戸の蘭学者・箕作阮甫に弟子入りを願い出たが断られたので、赤坂溜池の福岡藩屋敷内に住む永井青崖に弟子入りした。弘化3年（1846年）には住居も本所から赤坂田町に移る。この蘭学修行中に辞書『ドーフ・ハルマ』を1年かけて2部筆写した有名な話がある。1部は自分のために、1部は売って金を作るためであった。この時代に蘭学者・佐久間象山の知遇を得た。象山の勧めもあり西洋兵学を修め、田町に私塾（蘭学と兵法学）を開いた。

渡米

万延元年（1860年）、幕府は日米修好通商条約の批准書交換のため、遣米使節を米国へ派遣する。この米国渡航の計画を起こしたのは岩瀬忠震ら一橋派の幕臣である。しかし彼らは安政の大獄で引退を余儀なくされたため、正使・新見正興、副使・村垣範正、目付・小栗忠順らが選ばれ、米国海軍のポーハタン号で太平洋を横断し渡米した。このとき、護衛と言う名目で咸臨丸もアメリカ・サンフランシスコへ渡航した。旅程は37日であった。咸臨丸では軍艦奉行・木村摂津守が最上位であり、勝は遣米使節の補充員として乗船した。咸臨丸には米海軍から測量船フェニモア・クーパー号艦長のジョン・ブルック大尉が同乗した。通訳のジョン万次郎、木村の従者・福澤諭吉も乗り込んだ。咸臨丸の航海を勝も福澤も「日本人の手で成し遂げた壮挙」と自讃しているが、実際には日本人乗組員は船酔いのためにほとんど役に立たず、ブルックらがいなければ渡米できなかったという説がある。

福澤の『福翁自伝』には木村が「艦長」、勝は「指揮官」と書かれているが、実際にそのような役職はなく、木村は「軍艦奉行」、勝は「教授方取り扱い」という立場であった。アメリカ側は木村をアドミラル（提督）、勝をキャプテン（艦長または大佐）と呼んでいた。アメリカから日本へ帰国する際は、勝ら日本人の手だけで帰国することができた。

神戸海軍操練所

帰国後、蕃書調所頭取・講武所砲術師範等を回っていたが、文久2年（1862年）の幕政改革で海軍に復帰し、軍艦操練所頭取を経て軍艦奉行に就任。神戸は碇が砂に噛みやすく水深も比較的深く大きな船も入れる天然の良港であるので神戸港を日本の中枢港湾（欧米との貿易拠点）にすべしとの提案を、大阪湾巡回を案内しつつ14代将軍徳川家茂にしている。

勝は神戸に海軍塾を作り、薩摩や土佐の荒くれ者や脱藩者が塾生となり出入りしたが、勝は官僚らしくない闊達さで彼らを受け容れた。さらに、神戸海軍操練所も設立している。

後に神戸は東洋最大の港湾へと発展していくが、それを見越していた勝は付近の住民に土地の買占めを勧めたりもしている。勝自身も土地を買っていたが、後に幕府に取り上げられてしまっている。勝は「一大共有の海局」を掲げ、幕府の海軍ではない「日本の海軍」建設を目指す。保守派から睨まれて軍艦奉行を罷免され、約2年の蟄居生活を送る。勝はこうした蟄居生活の際に多くの書物を

読んだという。勝が西郷隆盛と初めて会ったのはこの時期、元治元年（1864年）9月11日、大阪においてである。神戸港開港延期を西郷はしきりに心配し、それに対する策を勝が語ったという。西郷は勝を賞賛する書状を大久保利通宛に送っている。

駿府城会談と江戸城無血開城

明治元年（1868年）、官軍の東征が始まると、対応可能な適任者がいなかった幕府は勝を呼び戻した。勝は、徳川家の家職である陸軍総裁として、後に軍事総裁として全権を委任され、旧幕府方を代表する役割を担う。官軍が駿府城にまで迫ると、幕府側についてのフランスの思惑も手伝って徹底抗戦を主張する小栗忠順に対し、早期停戦と江戸城の無血開城を主張、ここに歴史的な和平交渉が始まる。

まず3月9日、山岡鉄舟を駿府の西郷隆盛との交渉に向かわせて基本条件を整えた。この会談に赴くに当たっては、江戸市中の攪乱作戦を指揮し奉行所に逮捕されて処刑寸前の薩摩武士・益満休之助を説得して案内役にしている。予定されていた江戸城総攻撃の3月15日の直前の13日と14日には勝が西郷と会談、江戸城開城の手筈と徳川宗家の今後などについての交渉を行う。結果、江戸城下での市街戦という事態は回避され、江戸の住民150万人の生命と家屋・財産の一切が戦火から救われた。

勝は交渉に当たり、幕府側についてのフランスに対抗するべく新政府側を援助していたイギリスを利用した。英国公使のパークスを使って新政府側に圧力をかけさせ、さらに交渉が完全に決裂したときは江戸の民衆を千葉に避難させようとして新政府軍を誘い込んで火を放ち、武器・兵糧を焼き払ったところにゲリラ的掃討戦を仕掛けて江戸の町もろとも敵軍を殲滅させる焦土作戦の準備をして西郷に決断を迫った。

この作戦はナポレオンのモスクワ侵攻を阻んだ1812年ロシア戦役における戦術を参考にしたとされている。この作戦を実施するに当たって、江戸火消し衆「を組」の長であった新門辰五郎に大量の火薬とともに市街地への放火を依頼し、江戸市民の避難には江戸および周辺地域の船をその大小にかかわらず調達、避難民のための食料を確保するなど準備を行っている。また慶喜の身柄は横浜沖に停泊していたイギリス艦隊によって亡命させる手筈になっていた。

この会談の後も戊辰戦争は続くが、勝は旧幕府方が新政府に抵抗することには反対だった。一旦は戦術的勝利を収めても戦略的勝利を得るのは困難であることが予想されたこと、内戦が長引けばイギリスが支援する新政府方とフランスが支援する旧幕府方で国内が2分される恐れがあったことなどがその理由である。

明治時代

維新後も勝は旧幕臣の代表格として外務大丞、兵部大丞、参議兼海軍卿、元老院議官、枢密顧問官を歴任、伯爵を叙された。

勝はこうした新政府の役職を得ながらも、仕事にはあまり興味がなく、出勤して椅子に座りただ黙っているだけの日々を送っていたという。本人は「部下に仕事を丸投げして判子を押すだけのような仕事しかしてないよ」と語っている。

座談を好み、特に薩長の新政府に対して舌鋒鋭く批判し続けた。西郷隆盛や大久保利通を、その後の新政府要人たちと比較して語っている。

徳川慶喜とは、幕末の混乱期には何度も意見が対立し、存在自体を疎まれていたが、その慶喜を明治政府に赦免させることに晩年の人生のすべてを捧げた。この努力が実り、慶喜は明治天皇に拝謁を許され特旨をもって公爵を授爵し、徳川宗家とは別に徳川慶喜家を新たに興すことが許されている。

そのほかにも旧幕臣の就労先の世話や資金援助、生活保護など、幕府崩壊による混乱や反乱を最小限に抑える努力を新政府の爵位権限と人脈を最大限に利用して維新直後から30余年にわたって続けた。

勝は日本海軍の生みの親ともいべき人物でありながら、海軍がその真価を初めて見せた日清戦争には終始反対し続けた。連合艦隊司令長官の伊東祐亨は、勝の弟子とでもいべき人物であり、清国の北洋艦隊司令長官・丁汝昌が敗戦後に責任をとって自害した際は勝は堂々と敵将である丁の追悼文を新聞に寄稿している。勝は戦勝気運に盛り上がる人々に、安直な欧米の植民地政策追従の愚かさや、中国大陸の大きさと中国という国の有り様を説き、卑下したり争う相手ではなく、むしろ共闘して欧米に対抗すべきだと主張した。三国干渉などで追い詰められる日本の情勢も海舟は事前に周囲に漏らしており予見の範囲だった。李鴻章とも識り合いであり、「政府のやることなんてえのは実に小さい話だ」と後に述べている。

晩年は、ほとんどの時期を赤坂氷川の地で過ごし、政府から依頼され、資金援助を受けて『吹塵録』（江戸時代の経済制度大綱）、『海軍歴史』、『陸軍歴史』、『開国起源』、『氷川清話』などの執筆・口述・編纂に当たる一方、旧幕臣たちによる「徳川氏実録」の編纂計画を向山黄村を使い妨害している。その独特な大風呂敷な記述を理解できなかった読者からは「氷川の大法螺吹き」となじられることもあった。

晩年は、ジャーナリストを相手に自説を開陳するものの、子供たちの不幸に悩み続け、その上、孫の非行にも見舞われ、孤独な生活だったという。

明治32年（1899年）1月19日に風呂上がりにブランデーを飲んですぐに脳溢血により意識不明となり、21日、77歳で死去。最期の言葉は「コレデオシマイ」だった。これが江戸時代最後の幕臣として徳川の幕引きをした男の最後であった。

◆参考文献

石井孝『勝海舟』吉川弘文館〈人物叢書〉。

『勝海舟のすべて』小西四郎編、

新人部真長『勝海舟』上巻、PHP研究所1992年

江藤淳『海舟余波 わが読史余滴』〈文春文庫〉、1984年。

半藤一利『それからの海舟』筑摩書房、2003年。／（ちくま文庫 2008年）。

クララ・ホイットニー『クララの明治日記 勝海舟の嫁』上巻、一又民子・ほか訳注訳〈中公文庫〉、

1996年。クララ・ホイットニー

『クララの明治日記 勝海舟の嫁』下巻、一又民子・ほか訳注訳〈中公文庫〉、1996年。

松本健一『幕末の三舟 海舟・鉄舟・泥舟の生きかた』〈講談社選書メチエ〉、